

キルケゴールの宗教的実存について

——「死に至る病」を中心に——

明 石 裕

『死に至る病』の緒論のなかでキルケゴールは『ヨハネによる福音書』第十一章四節を引用して、キリスト教による死の理解と一般的な死の理解とを比較して、キリスト教の死の理解がどれ程奥深く、それによれば死がどれほど恐るべきものであるか、ということ述べています。「人間的に言えば死はすべてのものの終わりである——人間的に言えばただ生命がそこにある間だけ希望があるのである。けれどもキリスト教的な意味では死は決してすべてのものの終わりではなく、それは一切であるものの内部におけるすなわち永遠の生命の内部における小さな一つの事件にすぎない。キリスト教的な意味では、単なる人間的な意味での生命におけるよりも無限に多くの希望が、死のうちに存するのである。」このように、キリスト教的な意味では死でさえも「死に至る病」ではない、といわれます。それでは、キリスト者のみかその意味するところのものを知り、かつそれを怖れることを知

っているという「死に至る病」とはいったい何であるのか、キルケゴールがこの著書で明らかにしているのはそのことでもあります。

さてここでまず、死について予備的な考察をしておきたいと思えます。死が端的に意味するのは肉体の死です。この死は「誕生」とともに人間の現存在の可能的限界領域を画定するところのもですが、死をもって人間は一切の根源的可能性を奪われて無と化すこととなります。そこでこの白然的・肉体的死は、主体にとって覚悟を要する問題となります。主体はこの経験不可能なものとしての死を現在にまでたぐりよせ、一瞬一瞬が最後の営みとなるほどまでに死をひきうけることによって内面化するならば、死は生へと転換し、生を充実させるものとなるまでに深められるでしょう。ところがさらに根源的に考えるならば、この主体的な死の内面化が観念の空転に終わらないためには、それすらを支える究極的な実

体が存在していなければなりません。この実体こそ、おそらくかつてソクラテスが「不死の魂」と呼んだものであり、今またキルケゴールが語ろうとしているものではないかと思われれます。キルケゴールが「死に至る病」のなかで求めたものも、魂にとっての生であったといえると思います。この魂にとっての生が損われることが、人間がもっとも怖れなければならない「死に至る病」なのです。

さてキルケゴールは、この「死に至る病」を第一部では「精神」の病であるとし、これを「絶望」と呼んでいます。ここで「精神」とはキルケゴールの人間の定義です。この場合「精神」という定義は、ヘーゲルの「精神」あるいは「絶対精神」を思い起こさせますが、それとは意味を異にしています。ヘーゲルの「絶対精神」とは、理念であると同時にその具体的自己展開の過程であり、その究極態においては思惟と存在とが何ら矛盾しない、といった一元論的な世界の唯一の実体として考えられています。キルケゴールの「精神」とは、それ自身では「存在」の座を与えられていない、浮動し、生成する関係存在であります。

キルケゴールは人間を定義するにさいして「精神」をさらに「自己」とも置きかえています。この「自己」とは人間の諸々の能力や機能の相互作用、すなわち関係であるとしています。この関係はたんなる関係ではなく、

「関係が関係自身へと関係するような一つの関係」であり、かつまた「関係がその関係の措定者に対しても同時に関係しているような一つの関係」と考えられています。このように「自己」とは二重の関係構造をもった関係である、ということができるわけですが、この「自己」は、この二重の関係構造のうち一方でも欠いたときには本来的「自己」ではない、ということになります。この二重の関係構造は次のように考えることができます。すなわち、「自己」とは関係が関係それ自身に関係する一つの「関係」なのです。二つの関係は常に未完結の状態に置かれているということになります。つまり、この総合としての「自己」は、すでに顕在化してしまった既定のものではなく、「自己」となることを課題としてもっているような、生成しつつある、自己となりゆく弁証法的運動の途上にあるものであり、したがって可能的なものであります。そして同時にこの「自己」は、「自己」の措定者の力を支えとしないならば、いつまでも生成の運動のなかに身を委ねながら、存在の場へと立ち出でることができないこととなります。キルケゴールによって「自己」とは、こうして常に無に直面しながら「自己」となることを目標とする関係の総合であるというふうに考えられます。

これまでのところから明らかのように、人間自身はそれ自身では根なし草のような存在であり、パスカルのこ

とばかりすれば「虚無に向かつてさしかけられた一本の橋」であるということが出来ます。ここで大切なことは、キルケゴールは、人間は自分の内面には真理をもたない、と考えていることです。この視点からのキルケゴールの近代哲学批判は、デカルト以降の近代哲学の主流をなす考え方は、その根底に「意識」あるいは「理性」をその根拠とした人間中心主義の思想をもっており、これは人間の悟性あるいは理性が真理を獲得できるか、あるいは人間そのものが真理の高みにまでのぼりつめられるという、もっぱら人間の側に真理への道の権利をもっていると考えることに対する批判です。

因みにキルケゴールにとっては真理とは、彼の日記を引用すれば「そのために私が生き、そして死にたいと希うようなイデー」のことでした。すなわちまた別の著書で「主体性こそ真理である。主体性こそ現実性である」と述べていることと同じことですが、この立場からも近代の哲学思想は批判をうけることとなります。「彼はひとつの立場というような抽象的、観念的存在ではなくして実存に生きる一個の人間である……(中略)……またいろいろの立場を抽象的に考察することを、その立場に身を賭けて生きることとも簡単にすり替えて、それらの立場についての知識をもっていること即それによって生きる」と短絡的に考えてしまうところに近代の学問の根本錯誤がひそんでいるのである……」

さてこのようにして、自己自身の内に真理をもたない、あるいは自己自身の力だけでは自己実現も、生の保証を得ることもできない神によって措定された人間が、それにもかかわらず自己自身の力だけで「自己」であろうとする、あるいは「自己」となることを放棄しようとする、これをキルケゴールは「絶望」と呼びます。これらのことから「精神」という人間の定義には、人間は自分が死すべきものであり、無と隣り合わせにある無力な存在であることを知っているが、かつまた、措定者たる神への正しい関係をもつことによって生成の場から存在の場へも立ち出でられることを知っているというキルケゴールの人間理解がこめられているわけです。

神との関係からみた「絶望」とはその誤れる関係にはかならないのですが、逆に「絶望」は人間がもともと神によって創造されたものであり、信仰をもつべく定められたものであることの△信号▽でもあることとなります。それゆえ逆に「絶望」することなくしては「信仰」ももたえないのであって、この「絶望」という白覚的なニヒリズムを徹底して内面化することを通して人間は「信仰」をとり戻すことができるのです。キルケゴールのことはを引用すると、「……絶望もまた信仰における第一の契機であるという点に実に弁証法的なるものが存するのである……そこからまた、人間にとって意識とは神が人間に、自分の側には真理は存しないことを自覚するためのアイ

ロニーという手段として与えたものではないか、という考え方も成り立ちえます。デカルトは、「コギト」こそ人間の存在を確証する原理であると考えましたが、それはキルケゴールにおいて逆説的な意味で妥当することになります。

以上が『死に至る病』第一部の中心となる考え方ですが、この第一部と、続く第二部との間には質的な隔たりがあり、この断絶は、彼のいわゆる実存弁証法、すなわち実存の諸段階を大きく二つに区分するところの一つの転回点に対応しているように思われます。それは、実存の弁証法では宗教的実存と名づけられたものがさらに宗教的実存Aと、宗教的実存Bとに区別されているという点です。この両者の相違は、宗教的実存Aが、自己の内面を深めてゆくことによって自己の永遠性（これはさきに述べたように神によって措定されたという規定から生ずる）に目ざめ、そこから宗教的感情を抱くことであり、キリスト教以外の宗教にもみられる宗教感情一般を広くさすのに対し、宗教的実存Bのみが特殊キリスト教的実存とされ、これはキリストの受肉と甦りという歴史的事実をその出発点としてもつ啓示宗教であります。この二つの宗教的実存のあり方を基準にして考えるならば、『死に至る病』第一部で述べられている信仰への道は宗教性Aに、また第二部で述べられている信仰への道は宗教性Bに、それぞれ照応しているといえると思います。

第一部では、人間が自らの意識によって内面をほり下げていくことによって「自己」のうちなる永遠性に目ざめ、宗教的感情を抱くに至る過程が叙述されていますが、キルケゴールによればこの宗教性は依然として人間を「自己」の尺度としており、いまだに人間に内在的に真理をとらえようとしている。真の「自己」となるためには、キリスト（ \parallel 神）をその尺度としなければならない、と考えます。「自分が神の前に現存していることを自己が意識するに至るとき、自己が神を尺度とするところの人間の自己となるとき、それはどのような無限の実在性を獲得することであろう！」そして神を前にして「絶望」しつづけることが「罪」であるとされます。

さて、キリストを尺度とした「自己」、すなわち真の宗教的実存はキルケゴールによって次のように考えられています。神は罪によって墮落した人間と和解するため自分の側から人間に対して譲歩する。キルケゴールのこゝとばを引用すれば「この人間のために、ほかならぬこの人間のために神は世に來り、人の子として生まれ、苦しみを受け、そして死んだのである！」「この受難の神がこの人間に向かって、彼に申し出でられている救助を受け入れてくれるようにと乞うている。いなほとんど嘆願しているのである。実に、もし世に気が変になるほどの何物かがあるとすれば、これこそまさにそれである。」
永遠なるものである神は、時間的なるものと歴史的な瞬間

間に接触し、自らをもっともいやしい人の姿に身をやって現われ、人の手にかかって死ぬのである。この事実が人間にとってはまさに驚嘆の対象となるばかりであり、人間の悟性にとってこのことは全く非合理であってこれ以上に不可能なことはまたとないと思われるようなことであるから「逆説」といわれます。神はここまで歩みよる。だがそのあとは各人の決断にゆだねられる。神の側からのこの罪の宥しの巨人な歩み寄りを受け入れることが信仰にほかならないのであるが、しかし多くの人間はここで躓くのである。躓きとは、この神による罪の宥しを受け入れられずに依然として人間的なものにしがみつこうとする態度のことであるとされますがこの「逆説」を悟性的に理解しようともかくともその一つとされま

す。キルケゴールはこのことについて「けれども人間がかかるキリスト教的なるものを理解しうるであろうか？決してできはしない。キリスト教的なるものとは実にそういうものである。それだからまた、それは躓きを惹起するのである。キリスト教なるものは信ぜられなければならぬ。人間が理解しうるのは人間の領域内のことである。――神的なるものに対する人間の関係は信仰のほかにない。」と述べています。もしこの逆説を悟性的に解明しようとしても彼は「中間領域」をさまよいつけるだけであろうし、たかだか「真理の近似値」をえられるにすぎないだろう、とも述べています。このように神の側

からの罪の宥しに絶望することが「つまづき」の意味です。

信仰を決断するためには、悟性的なもの（すなわち「人間」に内在する小さいもの）から質的に「飛躍」しなければなりません。この意味で信仰とは「情熱」であり、「冒険」であるといわれ、また「賭け」であるともいわれることとなります。

さて宗教性Aを「内在」の宗教性と呼ぶならば、宗教性Bは「超越」の宗教性と呼ぶことができます。いったんキリストの存在を知った後にはだれも信仰を決断するか、あるいは罪のうちにとどまりつづけるか、二者択一を迫られることとなりますが、いずれを選ぶにせよ、それは自己の責任による意志的な選択となり、したがって罪の状態にとどまっていることも、積極的で意志的な行為と考えられています。この積極的で意志的な選択行為は「あれか―これか」と呼ばれます。

この飛躍への決断を選びとるのは一人一人の人間です。各人がただ一人神の前に立ち、信仰を選びとること、これがキルケゴールの「実存」の意味です。信仰の決断は各人の責任において、ただ一人によってなされなければならぬのであるから、宗教的実存に生きる人間の範疇は「単独者」と呼ばれることとなります。キルケゴールが様々の機会に群衆としての人間の生き方を厳しく批判しているのは、このためであると思われれます。彼は当時

のデンマークのキリスト教界のあり方について、そこでは洗礼を受けさえすれば人は誰でも生まれながらにしてキリスト者となれると普通一般に考えられており、誰一人としてそのようなキリスト教に疑問を抱くものはいない。このように人々は現にあるがままのあり方を自分の既定の所与、前提と考え、可能性のすべてであるとする態度をとり、与えられた漠然とした「群集」という一つの抽象物のなかに埋没して自分にとってのイデーを求めようとし、と痛烈に批判しています。このように現にあるがままの存在の仕方を無批判に受け入れる生き方をキルケゴールは「現存在」と呼んでおり、先の宗教的実存を選びとっていく主体的生き方と対極をなすものと考えています。このようにして現存在から実存へと超越していくことは、「単独者」となることによってのみなじうることであるといわれます。

はじめに死についてのキルケゴールの緒論の部分に触れましたが、死が意識にのぼるのは、人間が個人として自分の内面を静かに反省するときです。人間を類としてとらえたり、たんに社会的存在としてとらえたりしたとき、類の存在するかぎり人間は死ぬことはないのですから、ここでは死は問題とはならなでしょう。死を想いそれを通して永遠の生を想うことは単独者として生きるもののみがなじうることです。キルケゴールの思想は直接には信仰を忘れたキリスト教圏の思想や教会へ向けられ

たものですが、精神としての人間にとっての真実の生、すなわち永遠性こそ、キルケゴールの関心であり、われわれへの提起する問題でもあると思います。

(神戸大学大学院生)